

Q 6 知的障害者に特徴的な行動あるいは性質がありますか。それに対してどのような配慮が必要ですか。

知的機能の低下に伴うさまざまな行動特徴が見られますが、それらは、知的障害に直接関連するもの（一次的特性）と、周囲の人の不適切な養育や扱いにより培われるもの（二次的特性）とに分けられます。

<一次的特性と必要な配慮>

理解力・表現力の乏しさ

視力や聴力に問題がないのに、見たこと聞いたことを整理して理解・表現することが困難で、模写や反復させると不正確になる場合があります。例えば、作業の手順などを教える時に向かい合って指導すると、左右が逆になり混乱してしまいます。作業等は完全に覚えるまで繰り返し教えることが必要です。

抽象化・一般化が困難（応用力に劣る）

ある課題に直面した場合、それまでの経験を踏まえて臨機応変に対処することが苦手で、異なる状況でもそれまでのやり方を押し通して解決しようとする傾向があります。初めてのことは十分理解するまで具体的に教える必要があり、また、できる限り多くのことを体験を通して学習させることが重要です。

記憶の不安定性

自閉傾向のある人の中で機械的な記憶に優れている人もいますが、一般的には一度に複数の指示を与えると混乱してしまいます。重要なことは反復させ確認を求めるなどの配慮が大切です。

見通しの欠如

先のことを予測し、計画を立てて行動したり欲求をコントロールすることが困難です。例えば、明日の仕事に備えて早く寝る、お金を計画的に使う等は、一つひとつ教えることが必要となります。ただ、一旦良い生活習慣を身につけると持続できる人が多いのも特徴です。

コミュニケーションの障害

大部分の人は、日常会話にはそれほど支障がありません。ただ、障害のない人から難しい言葉が使われたり早口で話されると緊張してしまい、聞き返すと怒られるのではないかという恐れから、聞き返すこともできなくなってしまいます。知的障害者と会話する際は、ゆっくり時間をかけ、わかりやすい言葉を選び、時には絵などを交えながら話すこと、また本人の伝えたいことを十分理解する配慮が必要です。

<二次的特性と必要な配慮>

自己認知が不適切

漠然と周囲の人と違うという圧迫感を抱いているものの、自分の障害や欠点を十分認識できていません（多くの知的障害者は、「障害者」とは身体障害のある人だと思い込んでいます）。周囲の人が本人に対し、自分でできること、援助が必要なこともあること（例えばローンを組む場合には必ず信頼できる人と相談すること）を日頃から教えておく必要があります。

情緒不安定になりやすい

能力以上のことを求められたり、責められたりすると、自信を失って寡黙あるいは無気力になったり、あるいはパニック状態に陥って問題行動を起こしてしまうこと（物を投げつけたり、自分を叩いたりする等）があります。周囲の人は、本人の能力を超えることを要求しないと共に、本人の得意な面や可能性を見極めてできることを増やしていき、自信をつけさせることが重要です。

人権が侵害されやすい

不当な仕打ちにあったとき、自分がどのような状況に置かれているか、どのように自己主張し正当に自分を守るかについて理解することが困難です。そのため、いじめ・差別・搾取等の被害を被ることが多いのが現状です。

* 参考文献「知的障害者の人権を守るために～相談者のためのハンドブック」
厚生省大臣官房障害保健福祉部障害福祉課監修（中央法規）